

書き換えられる〈生〉、書き換えられざる〈生〉

——幸田露伴『縁外縁』における温泉をめぐる

安藤史帆

近代以前より温泉は、「病」と関わり合う場として発達してきた。

しかしながら、明治前期、伝染病対策として、全国各地に衛生局を設置するなど衛生行政の具体的整備が進められ、民間に衛生論が流布していくなかで^(一)、その場と与えられた役割は変化する。一つにそれは、従来の養生論ではなく「国家（国民）の衛生」を基軸に、民衆の慣習や日常生活を規律化する場、あるいは「文明化された」身体（観）を作り上げる場としての役割である。他方で、衛生行政組織機構の管轄のもと、特定の病者を収容する施設を置いて、国家から忌避されるべき他者を困い込む場としての役割を付与されていた。すなわち、温泉は、近代国家の権力関係のうちに取り込まれ、文明化された身体を歓待する〈観光〉の場と、病者を隔離する場という二面性を与えられ、国民国家経営の一端を担うイデオロギー装置となり得た。実際、近代以降の草津温泉や湯の峯温泉において、一般旅行者とハンセン病患者の滞在場所や処遇を区別するという変

化が起きている。

一方、〈文学〉に描かれた温泉場には、このようにして出会うことのない病者としての他者との邂逅あるいは衝突の契機が内包されている。本稿では、文明化された身体を持つ〈観光〉する国民と、一般社会では身の置き場の与えられない存在が温泉で出会い、語り合う幸田露伴『縁外縁』を読み解くことを通して、実社会で隠蔽される〈生政治〉の暴力性を明らかにしていく^(二)。

1 はじめに

一八九〇年一月から二月にわたり雑誌「日本之文華」（博文館）に幸田露伴『縁外縁』は掲載された。その物語内容は次のようなものである。東京からふらりとやってきた旅人〈露伴〉は、日光湯元から峠越えをして、群馬県側へと向かった。その山中で、温泉を引い

た庵に住む〈妙〉という女性と出会う。〈妙〉の身の上話を聞いて〈露伴〉は一夜を明かすが、夜が明けると〈妙〉は消え、そこに髑髏が残されているだけだった。そして下山した〈露伴〉は、小川温泉の宿の主から山中に迷い込んだ女の話を聞き、〈妙〉が「癩」を患い、さ迷い歩いていたことが発覚したのだった。

本作は、数十年にわたって改稿され続けるという経緯を持つ作品だ。同年六月『小説 末葉集』（春陽堂）に収録される際に、『対髑髏』と改題された。その後、『縁外縁』あるいは『対髑髏』のいずれかの題名を掲げ、若干の改稿が加えられながら、複数の媒体に収録されていった。初出からそれらの媒体への改稿の変遷をたどったとき顕著な変化を確認できるのは、『露伴叢書』（『縁外縁』博文館、一九〇二年）と、『名家傑作集 第五編 白露紅露』（『対髑髏』春陽堂、一九一六年）だ^(三)。前述した物語の筋が変更されるわけではないが、これらには、結末部にある、夜が明けた後の〈露伴〉の心境、小川村の宿の亭主が語る〈妙〉の描写、物語の末尾という三カ所に大きな変更が加えられている。

これまでの先行研究において、こうした経緯を踏まえた『縁外縁』は、作者露伴あるいは〈露伴〉と自称する語り手との関係から読み解かれてきた。本作の物語世界は、〈露伴〉が受け止めた「美より醜と化した現実、醜より美を生じた幻想」^(四)や、「女性という存在」の美と醜の「両極」^(五)が描かれているものと評価されている。それを受けて、井波律子は、本作の世界を、作者露伴の「脱中心志向」によって選り取られた「異界」と指摘する^(六)。登尾豊は、〈妙〉の苦悶

を作者露伴の実生活上の悩みとして見出し、作者露伴が同時期に仏教に傾倒していたことを背景に、仏教的な悟りによって救済される超越的存在として〈妙〉を描き出したとした^(七)。こうした登尾の、〈妙〉の境地を〈露伴〉が了解するという見解に対し、関谷博は、凡庸な語り手〈露伴〉が、〈妙〉の語りを超越的な悟りと見誤る物語として読み解いている。そのうえで、大幅な改稿の経緯を、作者露伴が「文学スタイルの再建を模索」^(八)したことと結びつけて説明した。また、草稿となる「大詩人」と『縁外縁』の関係を分析した出口智之は、『縁外縁』の幾度もの改稿が、「作者として作品の言説に対する責任を何らかの形で明示的に負おうとする」作者露伴にとつて、草稿とは独立した物語を形作るための作業であったことを指摘した^(九)。

このような作者露伴との関係から本作に迫ろうとする研究の流れは、幸田露伴研究史に通ずるものがある。幸田露伴の諸作で注目を集められたのは、世に受け入れられず、鬱勃たる闘志を抱え、芸術の道に励む職人としての主人公が描かれる「風流仏」や「五重塔」などの初期作品群だ。これらの作品は、余市から脱出して帰京し、作家への道を歩む作者露伴自身の姿と重ね合わせられて解釈されてきた。前田愛は、作中の主人公に「文士としての成功を希求する露伴じしんの作家主体」が投影されていることを見出し、山田有策も露伴の「鬱情」が噴出されたものとして初期作品群を位置づけた^(一〇)。こうした読解を批判的に乗り越えようとしたのが、露伴の仏教精神や個人的価値観に着目した登尾豊や関谷博であった。しかしながら、

本作において、登尾が仏教的観点から作者露伴と〈露伴〉を重ね合わせ、関谷が作者の個人的問題と作品成立の相関関係を析出するように、露伴研究における作者露伴という縛りが解かれることはない。最近では、出口智之によって、初期作品ばかりでなく、多種多様の作品の細微にわたる分析が行われ、露伴研究の分析対象が広げられたといえるものの、作者露伴像を明らかにする試みから外れることはなかったといえる。

こうした作者露伴にフォーカスし露伴文学の全体像を捉えようとする議論のなかで見失われるのは、その意図とは裏腹に、その文学創作を阻む現実がいかに横たわっているのか、ということである。それを明らかにするためにも、本稿で注目したいのは、大幅な改稿を経てもなお、一貫している〈妙〉の存在である。〈妙〉は、他方では、「女性」としての生^(一)に前景化され、また他方では、特有の病を患う者として位置づけられてきた。しかし、どちらか一方であるというよりむしろ、女性であり、かつ「癩」を患っている〈妙〉を総体的に捉える必要がある。また、〈妙〉を「現世の苦の象徴」^(二)と位置付ける関谷と、近代病としての「ハンセン病」の「脅威」と提示する田中キヤサリン^(三)の分析において、〈妙〉の患う「癩」という病の解釈は、仏教的な病と、近代的な病との間で揺れ動いている。揺れ動く病の実態を明らかにしたうえで、〈妙〉の存在と改稿の関係を読み解く必要がある。

ここで、改めて〈妙〉の存在に迫るために、一つの手掛かりとなるのは、〈妙〉が温泉という場に自身の〈生〉を終着させていること

だ。〈妙〉は病者として苦境に追いやられた経歴を持つが、温泉を引いた山奥の庵に身を落ち着かせ、自活する場として選んだことを語っている。すなわち、温泉が〈妙〉にとって、その〈生〉のありさまを語り得る場であったといえるのだ。温泉が、〈妙〉の病とどのように関わり合いながら、その〈生〉を語り出す場として成立しているのか注目に値する。

よって本稿では、温泉を手掛かりに、〈妙〉の〈生〉の有り様を同時代の文脈の中で探り、その境地を思考する〈露伴〉を含めた周囲の視線と改稿の問題を捉え直し、『縁外縁』の新たな解釈の提示を目指す。まず、旅行者としての〈露伴〉と、病者としての〈妙〉にあって、温泉にたどり着くまでの足取りと温泉への期待に、差異があることを確認し、〈妙〉が温泉で自己を語り出すことの意義を指摘する。さらに、同時代のハンセン病への医学的見解の変化、それに伴う同時代の文学状況を参照しながら、〈妙〉に向けられた周囲のさまざまな改変と温泉という舞台の一貫性に関して、改稿を通して検討する。医学的パラダイムシフトと改稿の問題に触れつつ、温泉という場が、いかにして中心から疎外された存在としての〈生〉をテクスト上に映し出す可能性を保有するのか、『縁外縁』を通して考察したい。

なお、歴史的な文脈の中に本作を位置づけるためにも、本文上の「癩」という表記を本稿では採用するが、ハンセン病に対する差別意識や偏見を助長するものではないことを明示しておきたい。史料引用あるいは歴史上の用語として使用せざるを得ない限りにおいて「癩」

「癩病」等の語を使用し、その他は「ハンセン病」に統一する。

2 〈露伴〉と〈妙〉と「山中」の温泉

2. 1 自由な〈観光者〉としての〈露伴〉

本節では、一夜を共にする〈露伴〉と〈妙〉の山中の温泉にたどり着くまでの足取りを確認し、両者の間の差異を浮き彫りにする。〈妙〉が、〈露伴〉にとって異質な他者としてあると同時に、その存在が読者に社会の矛盾と向き合う契機を与えることを明らかにしたうえで、温泉という場を通して生み出される読解の可能性について考察したい。

『縁外縁』冒頭は、旅をする〈露伴〉の自分語りから始まる。仏語・源氏物語・西行や芭蕉等が引用され、日本古典の代表的な隠者のようにして、「唯ふら／＼」と旅に出た〈露伴〉の経歴が語られる。ここには、古典・仏教の知識を基盤にする一方で、西行や芭蕉の心を「嚙語」や「妄想」と捉え、仏道修行は「三日坊主の一時精進」に終わってしまうように、その文脈にとらわれず「浮れ心」に放浪する〈露伴〉が提示されている。そうした〈露伴〉を、関谷は「発端から戯画化された作者自身、笑われる役廻り」^(二四)と位置付け、知識教養を持つ作者露伴に照らし合わせたが、本稿で着目したいのは、日常から離れた風景や事物に一方的にまなざしを投げかける〈露伴〉の〈観光者〉としての側面である^(二五)。ふらふらと旅に出かけ、

日光湯元に遊び、金精峠を越えて山中の庵にやってくる〈露伴〉は、知識を有し自由に現代を生きる旅人、いふなれば自由な往来を許された〈観光〉の一端を担う者であるといえる。

丁度明治二十二年四月の頃は、中禅寺の奥、白根が嶽の下湯の湖のほとりの客舎に五目竝べの修業を兼て病痾を養ひ居たりしに有難き温泉の効能、忽ち平癒するや否や、丈夫素より存す衝天の気などといきり出して元来し道を帰るを嫌ひ御亭主是から先へ行く道は無いかと問へば。(初出『縁外縁』(一)、博文館、一八九〇年)

〈露伴〉は、中禅寺湖の奥にある白根が嶽のふもと、湯ノ湖のほとりにある宿屋(日光湯元の温泉か)に訪れた。温泉の湯の効能によつて平癒し金精峠の山越えを決すのだが、「病痾を養ひ居たり」とあるもののその目的は「五目竝べの修業」つまり娯楽を目的とした逗留である。〈露伴〉は、娯楽を目的に短期間温泉地に逗留し、「浮かれ心止み難く東西南北に這ひまは」ることができ存在なのだ。このように移動の自由を手にする男性であり、健康者であり、知識人であるからこそ〈露伴〉は、同様に移動が許されるはずのない他者である女性が山中に居ることを解せず、「人にあらずおのれ妖怪か」「女狐か、「世を捨てたる女」(尼)か、「世を捨ざる女」(遊女)かという予測しできない。うる覚えの「文帝遏慾文」を引用し、項羽が虞美人に惑溺したことを例に、女性存在が志ある男性の美德まっ

とうを妨げるという古典の中の女性幻想に依拠しながら、〈観光者〉として一方的なまなざしを投げかける。すなわち、〈露伴〉は、知識を有し、健常者として自由に当世を生きられる存在としての〈観光者〉の姿を強固に具現化するのだ。

2. 2 〈露伴〉に対峙する〈妙〉

それでは、その〈露伴〉のように〈観光者〉たりえない他者である〈妙〉は、なぜ山中に居るのか。〈露伴〉を迎え入れる〈妙〉は、なぜこの温泉を引いた山中の庵で暮らしているのか。〈妙〉の語る身の上話からすると、その山中で高德の僧に出会い、庵を結んだとされている。仏僧との出会いに身を落ち着かせたという経緯を踏まえ、〈露伴〉、あるいは先行研究は、〈妙〉を、宗教的に悟りを開き、人間を超越した存在と位置付けてきた。しかし、〈妙〉の山中での発心は、〈妙〉が神や仏に救いを見出そうとした一つの結果ではあっても、〈妙〉の語る〈生〉の一部分でしかない。まずは、「二」の場面において、〈妙〉が自身を異質な者として疎外しようとする〈露伴〉にどのように対峙し、「三」において、自身の人生をいかにして語るのかという点に着目し、山中の温泉へと導かれる背景を明らかにしてみよう。

「二」の場面における〈露伴〉に対峙する〈妙〉には、次の二点の態度・姿勢を看取することができる。第一に、〈露伴〉という存在に対して、自覚的に対等に渡り合おうとする態度である。些か揶揄

うような態度ではあるものの、〈妙〉が〈露伴〉の妄想や独りよがりな制すかのように口を挟むことで、〈露伴〉の思考回路や言葉に占拠されることのない場面が構成されている。〈妙〉は、「仰しやる事さへ通れば女子の云ふ事は通らずともよいと思」っていると思指摘するように、先回りして〈露伴〉の妄想を批判し、「御自分の御言葉だけ」によって勝手に「承知」していく〈露伴〉の独りよがりな思考回路を見抜く。ここで〈露伴〉に解釈不可能な存在として輪郭化される〈妙〉は、古典仏典の知識や教養を頼りに、当世を「ふら／＼」と、「浮れ心」に生きてきた〈露伴〉が解釈可能な「女子」ではないことを自覚的に引き受けている。また、〈妙〉は、うる覚えに文帝遏慾文を唱える〈露伴〉の見地の低さを罵ることができるような教養の持ち主でもある。〈妙〉が自身の病を知る以前、父の死を嘆いて三味線や琴の稽古に出なくなり、母が持つ様々な古典を読みふけるようになったという「三」のエピソードを取り上げてみよう。

母様が持玉ひし草紙くさ／＼に馴れ泥み（中略）冊子の中に幽かなる楽みをなせしが、終に癖となりて彼是見尽せし後は薄雪住吉伊勢竹取或は求め或は借りて三年の中に解らぬながら源氏狭衣にまで読み至り（中略）世の態の真実虚妄を覚え、むかしより男といふ者のあさましく（中略）おかしき女を好み（中略）髪容よきを愛る者なるをさとり（初出『縁外縁』（三）、博文館、一八九〇年）

《妙》は、「草紙くさ／＼」を読み進めることに「幽かなる楽しみ」を見出し、手元にあるものだけでは不十分で、買い寄せ、借り寄せては読み耽った。ここでのこうした古典の読書経験が、《露伴》との対話の中で活かされていたと考えられるが、「薄雪住吉伊勢竹取」から「源氏狭衣」といった王朝文学を読み尽くすなかで《妙》は、こうした恋物語の類に没入するのではなく、自身の欲望に十分に応え、「媚めかしく佞らへるおかしき女」を求める男性と、そうした男性に「迷ひ焦がれ」て翻弄される女性の立場を相対的に読み解くことができた。井上理恵は、「女であることの不条理」に苦しんでいた樋口一葉が、《女が生きる》ことの不条理・結婚拒否の思想が書き込まれたテクストとして『源氏物語』を受容し、『十三夜』の創作に繋ぎとめたとした^(六)。同時代に生きる一葉と《妙》は、同様の感慨を抱きつつ書物の世界へと接続していたのだ。また、小田切秀雄は、一葉の生きた時代に『源氏物語』を解釈し講義するのは容易なことではないと述べているが^(七)、生前の《妙》は、より識字率の低い明治初年の段階で、書物から知識や情報を収集し、「世の態の真実虚妄」、世の中の状況を把握する力を得ていた存在だった。《露伴》が、《妙》を「人間普通の道理にあるまじき事を恥らう様子もなく我に逼る女」、《妖怪》あるいは「悪魔」と位置づけ、人間として理解しなかったことは、《妙》が《露伴》の文脈の中では見逃されている、男性に對等に向き合い、對抗する教養・知識を持ちえた女性であったことを示唆しているといえるだろう。

第二に、世間的に自身の身の上が「浮世を厭ふ」べきものとされ

ていることを自覚し、《露伴》という自由な身の上と比較しながら、不自由な《生》を浮き彫りにしようとする姿勢である。

若き御方の何故の御旅行か知らねど定めし面白き事もござり
ましたるうにチトお聞かせなされ(中略)唯妾しは妙と申す氣
輕者去歲より此処に移りしばかり、おまへ様は。露伴と名乗る
氣輕者。扱は氣輕と云はるゝか。如何にも。何の上の氣輕。我
は何とも知らず山に浮れ水に浮るゝだけの氣輕。おまへ様は。

浮世を厭ふだけの氣輕(初出『縁外縁』(一)、博文館、一八九〇年)

自身を「氣輕者」と位置づけたのと同様に《露伴》が何気なく「氣輕者」と名乗ったことに対し、《妙》は、「扱は氣輕と云はるゝか」「何の上の氣輕」と強く反応し、その身の上を問い詰めるように聞き寄っている。《露伴》は自分を、世の中の山にも水にも浮れることができる「氣輕」、つまり何も気にすることなく世の中を生きている者としての「氣輕者」と答えた。その「氣輕」には世の中を生きている上での「自由」の所有者であることが指し示されている。それに対し《妙》は自身を「浮世を厭ふだけの氣輕」だと言い區別する。「何故の御旅行か知らねど」「面白き事」があつたなら、「チトお聞かせなされ」というように、旅行者として得た《露伴》の見聞、世の出来事へ関心を示し接続しようとする《妙》は、自分の関心に身を任せて行動できる《露伴》と同じ「氣輕」さを有する。しかし、

ここで〈妙〉は、〈露伴〉の自由気ままな「気軽者」に對置される「氣軽者」を主張するのである。

ここで重要になるのは、〈妙〉のいう、「浮世を厭」わねばならぬ「氣軽者」がいかなる存在であるのか、ということであろう。それは一つに、近代の恩恵を与る男性に對置される立場である。〈妙〉の明確な年齢は明らかではないが、一八八九年時点で〈露伴〉が「二十四五」、前年時点で小川村の宿の主人が「大凡二十七八」と見たことから推定すると、〈妙〉の出生は一八六〇年から一八六四年と推定できる。当初、小学校は「人民一般必ず学はずんはあるへからさるものとす」として、就学義務のある八年制の学校（下等四、上等四年）と規定されていた。学制頒布の段階で、〈妙〉が七歳から一一歳であったとするなら、義務とされる小学校下等科（六歳から一〇歳）、女児学校（七歳から一一歳）、中等教育機関の学齢年齢に該当するが、学齢期間中の女子の学校教育が一般民衆の通念となっていない時期でもあった^(一八)。三味や琴を習わせることができる裕福な家庭においても、女子に対する教育の価値が一般的に認められていなかった時期に学齢期のある〈妙〉は、〈露伴〉ほど「氣軽」に教養・知識に接続することができない存在だった。

また他方でそれは、健常者男性に對置される立場でもある。〈妙〉は、東京の裕福な家庭で産み育てられたが、「癩」という病を患っていた。この点を考慮してみれば、〈露伴〉のように「氣軽」に世間に身を置くことが出来ず、「世を厭」わねばならない〈妙〉の状況が鮮明に浮かび上がってくる^(一九)。「浮世を捨ねばならぬ」ない「妾等一類

の人間」として、若殿との結婚が許されない〈妙〉の立場は、「癩」という蔑視される病を前提に語られる。ハンセン病を患う者は、近代以前は広く皮膚病を含み、「癩」と称され^(二〇)、賤民身分として扱われることもあった^(二一)。明治維新後、四民平等を謳い、一八七一年には、旧来の賤民身分が平民身分へと編入される解放令が発令されたが、徴兵制度、学制、税制などの施策を実施する基本的台帳である壬申戸籍（一八七一年公布）には、身分の族称・職業・氏神・壇那寺などとともに病歴が記載されることとなり、忌避されるべき対象として「癩」は制度の中に組み込まれていく^(二二)。また、解放令含む一連の新政に反対する一揆が頻発する中で、被差別部落が襲撃されるという事態も少なからず生じていた。〈妙〉は、不自由なく暮らしたようにみえるが、近代制度の恩恵を与るには難しい立場にあつたといえるのだ。

このように、男性と對等に渡り合える、知識・教養を得るには難しい女性であることに加えて、「全く世をば避け厭」わねばならない「癩」という立場にありながら、〈露伴〉という男性知識人と對等に向き合い、自身の〈生〉を浮き彫りにさせようとしている点を踏まえるならば、〈妙〉を、美と醜の「両極」^(二三)を担う男性を魅了するだけの「女性」^(二四)として位置付けることはできない。また、同時期に仏教に傾倒していたことを背景に、〈妙〉の苦悶を作者露伴の実生活上の悩みとして見出した登尾の見解にあるような、悟りに救済された超越的存在でもないだろう^(二五)。〈露伴〉の前に表れた〈妙〉という他者の〈生〉は、従来指摘されてきたような知識人男性の望む

女性存在でも、救済される存在でもないのだ。知識や情報を頼りに、〈露伴〉の知と対等に向きあおうとする〈妙〉は、男性に従属的な女性の立場から脱出しようとする存在であり、異質な他者として当世を自由に生きる個としての〈露伴〉を前に自らの人生を語ることで、現実社会において見捨てられる〈生〉を照射する存在なのだ。〈妙〉と〈露伴〉の対話の場面には、男性に従属せねば社会的地位を得られず、自立もできない同時代の「齒痒」き女性でありつつ、病を前提に、国家への帰属を許されない「癩」として社会から排除される者が、男性権力に従属的な立場を否定し、その権力に抵抗する術を模索しつつ、現実社会に自身の〈生〉を証明しようと試みる過程が映し出されているのである。

2. 3 「山中」の〈妙〉と温泉

最後に、このように病を抱え、社会に見捨てられる個としての〈生〉が、「山中」山奥の温泉で語り出されていることについて考察を広げたい。

何処ともしらず迷ひあるく眼には幻影をのみ見て実在の物を見ず、あさましく狂ふて此山中に我しらず来りしが図らず道德高き法師に遭ひ奉り一念発起して、坐禅の庵りを此処に引むすびしばかり（初出『縁外縁』（三）、博文館、一八九〇年）

これまで、〈露伴〉が迷い込み、〈妙〉との出来事が繰り広げられる「山中」は、「異界」と見做される傾向にあった。井波は、露伴の「脱中心志向」や「現実世界とは次元を異にする異界志向」によって生み出されたのが、地方を舞台とした初期の作品群だったと位置付けている^(二六)。また、山崎は、「山中」を「人間社会が作りあげてきた制度」が存在しない天と人界の境界の「暗喩」とみて、そこで〈妙〉が『女性』としての生を全的に受けとめてくれる全的な男性の訪れを待っていたとした^(二七)。しかし、現実社会において帰すべき場所が与えられない自身の〈生〉を終着させる場として、〈妙〉が「山中」の温泉を選んで注目に値するとき、「異界」としてではなく、むしろ現実世界と密接に関わり合う、〈妙〉の〈生〉の痕跡となるような場が浮かび上がってくる。なぜなら、温泉には、ハンセン病と関わり合い、湯治的な療養の場から、西洋医学的根拠を持つ医療の場へと移り変わっていたという歴史的背景があるからだ。

明治に入り、公衆衛生・地誌編纂・資源調査などの視点から全国の温泉が調査の対象となつて、一八七三年に政府による鉱泉調査が開始される。その分析結果は、試験分析の実務を担ったオランダ人ヘルツの著述をもとに、『日本温泉独案内』（一八七九年）として翻訳出版され、一般人にも公開された。一八八六年には内務省衛生局から『日本鉱泉誌』が出されている。また、お雇い外国人ベルツ博士は、日本の温泉地を調査分析し、論文にまとめ、海外に発表するなどしていった。すなわち、明治初年代において、温泉治療には、新たな意義が与えられ、注目と期待が寄せられていたのだ。

「癩」病もその例外ではなく、温泉の成分分析に基づく「効能表」を通して、「癩病に効能ある湯治場」が認知されるようになる。もちろん江戸時代以前においても、好意的ではないとはいえ、「癩」病患者を受け入れた湯治場は存在している。断片的な史料から、「癩」病治療で著名な群馬県の草津温泉を含め、日本各地の温泉場に多くの患者が療養に訪れたことがうかがい知れる^(二八)。しかしながら、効能の認知が進行するとともに、温泉場が活発に観光地化し^(二九)、衛生国家建設のための温泉場改良政策が実施されることよって^(三〇)、従来湯治場から患者を排除し、「癩」病治療を行い得る温泉場は極端に限定されていたのだ^(三一)。

前述の草津温泉を例に挙げてみると、開湯伝説をもとに、近代以前も「癩」病に効能があると信仰されていたが^(三二)、明治以後、西洋医学的根拠が加えられている。幕末から維新にかけての動乱で湯治客が減少していた温泉街は、一八六九年に大火に見舞われ、経済に大きな打撃を受けた。そこで、復興策として湯治客の誘致を図り、効能の宣伝に力を注いだ^(三三)が、その際、発行された『草津温泉誌』には「癩」への効能が示され、「癩」病者が多く草津へと集まるようになったという^(三四)。政府のお雇い外国人である医師ベルツもまた、草津温泉を高く評価し、草津での研究をまとめ、草津の湯のハンセン病治療における有効性を発表している^(三五)。一方で、温泉街からの排除が求められた結果、病者たちが自立して住まう湯之澤集落が形成されもしていた^(三六)。

このように、西洋医学的効果が見込まれ、新たな観点から「癩」

と温泉とが結び付けられたが、従来の療養場となる温泉場から排除されるようになった結果、「山中深くに所在」する、「いわばひっそりと人目を忍んで湯治をするような場所」が「癩」病者に利用されるようになる^(三七)。同じ明治という時代に、資産家に嫁ぐ〈宮〉は熱海を訪れ^(三八)、『金色夜叉』、爵位ある軍人とのハナムーンに〈浪子〉は伊香保を訪れた^(三九)、『不如帰』。主人公の青年に財と名誉、立身出世の契機をもたらす〈春〉^(四〇)、『雪中梅』や、〈光代〉^(四一)、『書記官』が滞在するのは、箱根と思しき温泉地である^(四二)。しかし、〈妙〉が辿り着き、庵を引いたのは、小川温泉付近の山中であり、草津でもなければ、〈露伴〉が「一夜湯治」にやってきた日光湯元温泉でもなかった^(四三)。そうした名のある場ではなく、名もなき山奥の一つの温泉であることこそが、近代において「癩」という病を患う〈妙〉の姿を克明に浮かび上がらせるのだ。温泉を手掛かりにして読み解いたとき、〈妙〉が現実の世と関わり合う存在であることがわかってくる。

温泉とハンセン病との関りを顧みるとすれば、『縁外縁』に描かれる舞台は、先行論が指摘するような作者露伴の体験が反映される土地としての山奥でも、「暗喩」でもない。「人間社会」の「制度」に疎外されながらも、そのなかでの〈生〉の存続を模索したハンセン病の歴史的事実に裏付けられる「山中」であったといえる。山奥の温泉で、〈露伴〉という一男性に身の上を語る病者の女性が描かれる本作には、中心から疎外された病者が自己を取り戻そうとする過程が描き込まれているのだ。

次節でも述べる通り、本作は数十年にわたり改稿されるが、そう

した改稿を経ても〈妙〉が終着点として山中の温泉を選択することは一貫して変更がなかった。次節では、大幅改稿の理由とともに、改稿を経てもなお、山中の温泉にたどり着く〈妙〉の〈生〉の有り様について考察する。

3 外側から拘束された〈生〉——改稿、ハンセン病、そして温泉

3. 1 改稿に関する先行論の整理

世間から包み隠されるような「山中」の温泉を終着点として、自身の〈生〉を語る〈妙〉は、現実の世から切り離された個として存在している。しかし、〈妙〉が自身を「世間を厭」わねばならない「一類」とするように、世間から常に他者として規定される存在であることも確かである。とりわけ、〈妙〉に対する周囲の視座がうかがえるのは、差別的な描写を含む部分であるだろう。この描写は、いったんは削除され、その後、復活するという流れで改稿される箇所でもある。他方で、差別的描写の有無にかかわらず、「山中」の温泉を終着点とする〈妙〉の状況に変更が加えられることはなかった。そのような状況において、二つの疑問が生じる。病者を差別的に映し出す描写は、どのようなことを背景として削除と復活の過程をたどったのか。また、〈妙〉の〈生〉が一貫して「温泉」という場とかかわりあうのはなぜなのか。二節では、〈妙〉がいかに、自身の癩者としての〈生〉の痕跡を語りだそうとしていたのかに着目してきたが、

三節においては、〈妙〉の「癩」としての〈生〉が、第三者にいかに語られ、第三者のまなざしのなかに包摂されてしまうのか、その過程を、改稿の問題に結び付けながら考察したい。

まずは、改稿に関する先行研究を整理しておこう。塩谷贊の調査に基づき二瓶愛蔵が異稿の系統を分類しているように、『縁外縁』の改稿は、多数の先行研究で扱われている^{三九}。これらは、大正五年版にかけて、末尾が大幅に変更される以外に、主語を多く持つ文に句読点を挿入したり、語句を削除・変更したりすることで、体裁が整えられていくことを指摘する。しかし、このようにして稿と稿の異同が明らかにされる一方で、改稿が繰り返される意味を問うもの、改稿の流れを意味づけるものはまだ少ない。

関谷は、凡庸な語り手〈露伴〉が、〈妙〉の語りを超越的な悟りと見誤る物語としたうえで、大幅な改稿の背景には、凡庸な語り手〈露伴〉を造形したことに対する作者露伴の煩悶があったと説明する。そのために、明治三五年版、大正五年版の改稿の流れの中で、〈露伴〉の語の多くを〈我〉に変え、〈露伴〉の存在を後退させ、凡庸で無思考的特質を持つ〈露伴〉に含まれていた抑圧的な視座を緩和させようとしたと指摘した^{四〇}。また、出口は、関谷の指摘する〈露伴〉の削除に注目しながら、草稿「大詩人」におけるズレを埋め合わせるものとして、『縁外縁』成立と改稿を意味づける。「大詩人」では、好色な同衾の場面を描いたことに、作者露伴が「道義的な責任」を負って、同衾の相手が「癩」女であるという罰を〈露伴〉に与えた。しかし、妄想の出来事を現実において罰するというひずみが生じた

ため、『縁外縁』では同衾のモチーフを削除し、「大詩人」からの脱却を図った。改稿を重ねるにしたがって、作中から〈露伴〉の名が削除されていくのも、「大詩人」の影を排除するためだったとしている(四二)。

このように先行研究では、〈露伴〉の心境や視座の変更、ないし各稿の意味づけを、〈露伴〉の視座及び、作者露伴の文学的態度にのみ委ねてきたといえる。確かに、二つの大幅改稿が施されるのは、作者露伴による操作あるいは、語り手であり登場人物である〈露伴〉の見聞きしたこと、その心境と関わる箇所である。その点で、先行論の意味づけは至極妥当だといえる。しかし、その改稿は、これまで見てきたような〈妙〉の素性ともまた密接に結びついていることを見逃すことはできない。改稿は、〈妙〉に対する、〈露伴〉の心境、第三者の視線、語り手の見解の変化を表しており、改稿の問題が、病を患う〈妙〉の素性と関わり合っているからだ。また出口が指摘するように、その成立から改稿の過程が、〈露伴〉の想像の次元から、現実の次元へと物語を修正することであったとするなら、「癩」女を現実の次元において捉え直すことができる。朝日のさした片科川のほとりに白髑髏が〈露伴〉の前に現れるように、『縁外縁』の〈妙〉の〈生〉は、想像上ではなく〈露伴〉の現実に接続するものとして立ち現れてくる。

作者露伴あるいは〈露伴〉を揺さぶる現実を内包していた存在として〈妙〉を捉え直そうとしたとき、大きな示唆を与えてくれるのは、ハンセン病患者として表象される〈妙〉に注目した田中キヤサリ

ンの分析である(四三)。田中は、宿の主人による〈妙〉の「生々しい」描写には、「家族の血統を隠して社会に進出し、秘かに社会を汚染するハンセン病患者」が「投影されている」とする。そして、欧米で「文明国ではない」「植民地からもたらされる脅威」として位置付けられるのに対し(四三)、本作を含めた日本近代文学におけるハンセン病表象は、「国内から現れ、社会秩序を乱す脅威の象徴として登場する」と指摘する。しかし、田中が初出『縁外縁』(一八九〇年)の病の表象を、小酒井不木『直接証拠』(一九二六年)や岩田淑郎『病院をめぐる』(一九二八年)などの時代的にかなり下った探偵小説の小説群に接続し(四四)、「社会に内在し社会秩序を揺るがす危険の象徴」という共通項を見出したことは些か性急かもしれない。探偵小説が続々と登場する以前にある『縁外縁』の二つの改稿の問題を回避し検討せずして、ハンセン病表象がいかなる過程を辿り表出されているのかを明らかにすることはできないのではなからうか。

そこで三節では、〈妙〉の「癩」という素性が、いかに〈露伴〉の視座及び、作者露伴の文学的態度に影響を与え、〈露伴〉の心境や視座に変更が加えられたのかを探り(3. 2から3. 5節)、新たな角度から改稿の意味づけたい(3. 6節)。なお、本稿では、改稿のうちでも大幅な変更が加えられている三つの箇所(夜が明けた後の〈露伴〉の心境が語られる場面、小川村の温泉宿の亭主が捉えた〈妙〉の描写、物語末尾に付された箇所、三つの版(初出、明治三五年版、大正五年版)を比較分析の対象とする。便宜上、それぞれの箇所を比較するために、その異同を表1に整理することとする(表①は本

文末尾)。

3. 2 三版(初出、明治三五年版、大正五年版)の比較検討

まず、第一に検討するのは、夜が明けた後の〈露伴〉の心境が語られる場面である。初出と明治三五年版のこの場面には大きな具体的内容の変更は見られない。どちらにおいても、〈露伴〉は一夜を共にした〈妙〉が髑髏であることを推定する。そのうえで、〈露伴〉は、面白い「伽」話ができたから、「淋し」くはないとして、なぜ彼女の魂が「有縁の亡者」として冥土をさま迷っているのか、そして「女自身にて此処にのたれ死弔ふ人さへ無」いのかを解さない態度を示す。初出と明治三五年版のこの場において、〈妙〉との昨夜のやり取りは、切実に捉えられる現実的な出来事ではなく、夜の徒然を慰めるような説話的なものとして捉え返されている。

一方で、大正五年版では、髑髏を前にした〈露伴〉は、見聞きしたことを頼りに「彼の中に我あり、我の中に彼あり」と〈妙〉の立場を、「我」に置き直して、〈妙〉の境地に思いめぐらせる。こうして、〈妙〉の語りの面白さではなく、切実さが強調されることで、夜の徒然を慰めるような説話的なものとしてより、現実的なものとして昨夜の出来事が捉え返される場となっている。

第二に注目するのは、小川村の温泉宿の亭主が捉えた〈妙〉の描写である。下山した〈露伴〉は、宿の亭主に、山奥に入ったまま出て来なかった「一人の乞食女」について問うた。初出で主人は、そ

の女の「怪しく光」る色黒赤い肌の様子、「屈みて筋もなきまで膨れ」た関節、跡を残す手足の指、溶けたような顔の相貌を詳らかに語り出す。さらに、「人をも神をも仏をも逆目に睨む瞳子」を持ち、「満腔の毒を吐くかと覚えて犬も鳥も逃避ける」存在とするように、その姿を「人」と区別する認識を示す。そして、「一目見るより胸あし」くさせ、世間の「誰も彼も」が「握り飯を与ふるだけの慈悲もせず」と語る。主人の視線を通して語られるのは、その相貌そのものに加えて、「癩病」に対する世の人々のまなざしであり、態度であるのだ。明治三五年版においては、この蔑視の含まれる執拗な描写は削除され、「癩病」が明示されたうえで、「忌まわしきありさまして狂ひ居た」ことのみが告げられる。一方で、明治三五年版で削除された初出の描写は、大正五年版では元に戻されており、差別的な視座を含む描写が、削除されたのちに復活する流れが確認できる。

第三に、物語末尾に付された箇所(以降では「あとがき」と記す。)を挙げる。第二で見てきた復活の流れは、「あとがき」にも同様のことが言える。初出に対して明治三五年版のあとがきでは、あらゆる束縛を受けながら、髑髏と化した〈妙〉の視座を「超然として造物の樊籠を脱」したものとした。一方で、差別的な描写が復活する大正五年版では、同様に「あとがき」も初出が復活している。明治三五年版のように「超然」と解脱する(煩惱から解放される)のではなく、初出と同様に、「我一夜の伽にせし髑髏はおかしからず洒落ず」として古典や仏典に表出されてきた「洒落た」る髑髏と区別して、〈妙〉の苦悩からの解放を明示しない。

このようにしてみると、第二と第三の点から、初出と大正五年版は連動するが、第一の点から〈妙〉との出来事が説話的なものから現実的なものへと推移していく変化を併せ持つという点で、大正五年版が単純な初出の復活ではなかったことがうかがえる。また、第一、第二、第三に共通して、当事者ではない男性知識人あるいは世間一般の人々といった第三者における解釈、視線を提示した箇所が大きく揺れ動いていることがわかる。各版における、〈露伴〉という男性知識人あるいは、小川村の宿の主人という世間一般の〈妙〉へのまなざしの在り様を捉え、その変化を明らかにするためにも、各版の時代に即し、社会において付された「癩」への認識を確認しておきたい。

3. 3 初出における旧来の病に対する認識の影響

初出時（一八九〇年）は、「癩」が、病原菌の発見により世界的に認知されながらも、明確な対策や治療法がなく、前近代的な天刑病としての認識に加え、西洋医学的認識からも遺伝説を保持していたときであった。一八七三年に発見されたらい菌は、一八七九年に承認され、感染説は学会及び一般に受け入れられるようになった^(四五)。しかし、ハンセン病を遺传的異常と捉える遺伝説は、各国の医学会、医学者の間で広く支持された見解であり^(四六)、感染説が優位になることはなく、遺伝説対感染説の対立軸は残されていた。前述したように、日本においては、依然として前近代の文脈における業病・天

刑病としての差別的解釈は残されていた。さらに、仮名垣魯文「高橋阿伝夜叉譚（たかはしおでんやしやものがたり）」の小説や河竹黙阿弥「綴合阿伝仮名書（とじあわせおでんのかなぶみ）」の演劇を通して、「天刑病」や「血筋」の病であることが共有されていく^(四七)。夫がハンセン病に罹患していることを物語の筋に関わらせることを通して、高橋お伝の物語は、男たちを翻弄させ、殺害する「毒婦」ものの系譜を成立させていたのだ。

こうしたハンセン病の血筋・遺传的性質は、『縁外縁』初出と同時に成立した尾崎紅葉『巴波川（うずまがわ）』（『新著百種』号外、吉岡書籍店、一八九〇年二月）でも強調されている。『巴波川』では、青木某という青年が、旅先で泊した宿の娘お蔦と恋仲になり契りを結ぼうとするが、お蔦は許されざる恋と解し、自殺をしよう。病の名は明示されないが、お蔦は「浅ましき病」を患い、「見さへいまはしき容」になる「因果のうまれ」であると遺書にて打ち明ける。「顔はくづれ眉毛はぬけて、二目とは見られ」ない姿となったとき、天刑病あるいは遺伝病と解釈され「世間に疎」まれる存在になることを想定したお蔦は、結婚を断念し、自らの命を絶たねばならなかったのだ^(四八)。『縁外縁』より後に出た『巴波川』は、その設定を仮借したとも考えられるが、『縁外縁』同様に同時代の病の解釈を引きずり込んでいたといえる。初出の小川村の宿の亭主の視線を紐解いてみたとき、その執拗な身体描写には、ハンセン病を、疾病そのものではなく、業病あるいは前世における悪業の報いと捉える認識が含みこまれていたのであり、同時代に共有された前近代由来

の「癩」への蔑視が留められていたのである。

3. 4 明治三五年版病者の削除と救済の機運

一方、明治三五年版の改稿時期は、初出時のハンセン病に対する認識が大きく変化する過渡期に置かれている。初出発表の後に、第一回国際らい会議（一八九七年）が開かれ、ハンセン病の感染説が国際的に確立し、医学的知見が集約されていく。ここで提唱されたのは隔離による予防策ではあったが、それまで不治の病とされ、具体的解決策のなかったハンセン病の治療、病態解明において新たな方向性をみせていた^(四九)。一方で、そうした解決の気運は、宗教界の救済の動向に連動して、矛盾した機運をもたらした。

新宗教の動きとして挙げられるのは、キリスト教宣教師が、ハンセン病者の救済活動を行ったことである^(五〇)。キリスト教関係者の目的は、隔離ではなく、新たな信仰の対象を与え、病者を救済することにあつたが、キリスト教によつて展開された「救癩」活動は、「救う者」と「救われる者」、「与える者」と「与えられる者」といった、上下・貴賤・浄不浄の二元論的關係を前提としていた^(五一)。「癩」をまなざす側を「救う」側に置き換えるとはいえず、そこには差別的な視座が残されていた^(五二)。キリスト教という新宗教の動きばかりでなく同時期の旧来の宗教すなわち仏教の動きにも、同様に二面性がある。日蓮宗身延山久遠寺の「癩者」を集めた「参籠所」は、「明治三五年夏」（一九〇二年）、「不潔」と「物議」を招き警察によつて焼

棄されるという事件が発生する一方で、それにより「困憊」する「癩患者」のため、綱脇龍妙が身延深敬病院という「救癩病院」を設立する契機（一九〇六年）がもたらされていた^(五三)。熊野本宮の参詣道となる湯の峰温泉においても、従来の「健患混浴」の風習が、一九〇三年の火災後の再建計画のなかで、「健患分離」へと移り変わっていく^(五四)。旧来、「民間治療場として貧困者や「癩病者」たちにとつてのアジール」として機能した宗教場の在り方が揺れ動き、国家に歩み寄る^(五五)。「妙」の描写を削除し、髑髏と化した「妙」が、「超然として造物の樊籠を脱」した（解脱した）ものとす明治三五年版には、こうした神や仏によつて救済されるかのような気運が内包されている。

一八九七年以後、明治三五年版改稿と同時期にハンセン病を描いた生田葵山『団扇太鼓』（一八九九年）にも、わずかながら同様の救済の兆しを見出すことができる。本作は、「癩」を患う宗太郎とその家族の物語である。宗太郎は裕福な家に生まれたが、体調を崩し、養生のために母に付き添われて箱根温泉に出かけた。しかし、病状の改善は見られず、宗太郎の容貌は醜くなつていく。実は、宗太郎は、母と村の「破落戸者」の「三次」との間にできた子で、その「三次」は、「恐ろしや癩病の血統ある男」であつた。「三次」の血を受け継いだ宗太郎には、表面的な変化が現れ、それによつて家族が「穢れし癩病の血」、「賤き血流」という偏見にさらされ、母は自害してしまふ。そうして、宗太郎は若くして巡礼者となるのだが、本作には病者に対する同情と救いの視座が置かれている。たとえば、語り

手は、「三次とて生まれながらにあゝした破落戸に成らうなどは、夢にも思」ったわけではなく、「悪しき病の血統に産れし身の不運は、世間の人が厭がりて、所詮交際では呉れず、お茶一杯一所に飲まふと云う人もな」いからであつて、「淋しい辛い境遇を、獨で暮らして行く内には、自づと心が邪僻む」かもしれないとする。また、母は、酷い境遇に突き落とされても身の不運と諦め、心毅然と正直一筋に生きれば、世の人から憎まれることはない、寂しく悲しい時には神仏を信心すれば、変な心は起こらないと、宗太郎に言い聞かせている。しかし、語り手が「あゝした病を憎む世間が悪いのか」、「真実の情は却てあの様な人にあるもの、口悪く誇る人こそ却て情知らず」として世間を批判する態度を示しながら、「云はゞ世の中の一歩可哀相な人」として「悪しき病の血統」を見出そうとするという点で、その神仏の救いと同情に孕まれる二面性を映し出す。

世間の人々の遺傳的認識を相対的に映し出すという点で、関義男が指摘するように遺傳という前時代の認識を踏襲している^(五六)。ようだが、「癩」の境遇を抱える者が同情され、その者の希望が神仏への信心に見出されているという点で、遺傳病としての差別と、差別対象への救済措置が混在した時代の認識を反映しているのである。新たな信仰の対象を与え進出するキリスト教とともに^(五七)、旧来の信仰の場を保つ宗教が、その「神仏」への信仰を利用して、国家へ同調するという新たな展開を見せる時期において、『団扇太鼓』と明治三五年版は連動し合っているのである。

病の苦悶に新たな解決を齎すかのようで、矛盾する側面を併せ持

っていた同時代の宗教の動きに呼应していたとするなら、明治三五年版は、小川村の宿の亭主の侮蔑が残されたままに、〈妙〉を救われる者として描き直す過程をたどっていたといえる。前近代的・医学的・宗教的認識が複雑に絡み合い、蔑視と解決・救済の気運が混在した時期に置かれたことで、蔑視を強調していた描写が揺らいだのだ。

3. 5 大正五年版描写の復活と国家的政策

そして、救済の気運に備わる矛盾を問うことなく、その矛盾に内包される蔑視・差別・排除にすり寄ることで解決を実現させる社会の動きに、差別的な描写を復活させ最終的な決定稿とする大正五年版は呼应している。日本では、国際会議を受けて、救済事業の側面と同時に、社会防衛、国家の体制維持の側面を持つ「癩予防ニ関スル件」(一九〇七年)を成立させた^(五八)。日清、日露戦争後、日本国内にはコレラやペスト等様々な感染症が流行すると共に、数万人のハンセン病者が存在する状況にあつた^(五九)。そうした状況を改善し、国民衛生を保ち、戦力低下を防ぐため、浮浪するハンセン病患者の隔離と収容が始まったのだ。国家体制を揺るがすものと見做されたハンセン病は、隔離という方策で対処されることとなり、それ以後、遺傳病ではなく感染症という認識のもと、治療薬の効果の限界が語られ、絶対隔離によって病撲滅が望まれる方向へと導かれていった。描写削除が施される明治三五年版の「あとがき」で、〈妙〉が解脱し

救済された存在として捉えられていたのに対し、大正五年版の「あとかき」では明確な位置づけが与えられないのは、現実社会において「神仏」による救済とは別の解決策が打ち出されていたからといえるだろう(六〇)。

細川涼一によれば、こうした国家体制を揺るがす病と見做す法的な整備の影響は、大正期以降の探偵小説のハンセン病表象に反映されている(六一)。これを受けて、田中は、探偵小説に共通する「社会秩序を揺るがす」「脅威」が『縁外縁』初出に描かれているとする(六二)。しかし、改稿の過程を踏まえて考えるならば、探偵小説に通ずる「脅威」は、初出ではなく大正五年版で復活した「癩」へのまなざしのなかに表れるものだったといえる。差別的対象の描写削除という揺らぎがまるでなかったかのように、描写を復活させる流れをたどる『縁外縁』は、一括りに「国家」あるいは「社会秩序」を揺るがす「脅威」と見做してしまえば、顧みられることのないハンセン病表象の推移を留めるものとして捉え直すことができるのだ。「癩」を隔離する対策が法的に整備される時期に置かれた大正五年版は、明治三五年版で揺らぐ病の位置づけを、新たに構築された排除の構造のなかで位置づけなおすことを通して、最終決定稿として提出されていたのだ。

3. 6 『縁外縁』改稿の開く視座

最後に、このようにハンセン病の医学的パラダイムシフトと合わ

せて『縁外縁』改稿を読み解くことの意義を二点提示しておきたい。第一に、ハンセン病表象の実態解明の一助になると同時に、〈近代文学〉に孕む問題の再考に繋がるという点で意義がある。明治三五年版と、大正五年版が、ハンセン病者の表象がベールに包まれていた空白期間に置かれていた点を考慮すれば(六三)、他文学作品のハンセン病表象の変遷に接続するものとして『縁外縁』の改稿を意味づけることができる。『縁外縁』の改稿を踏まえ、前近代的な病解釈の影響が色濃かった作品群から、探偵小説までを考えてみると、ハンセン病表象は外側から把持されるものとして映し出されていた。他方で、「隔離」を実現した療養所開設後には、その表象は内側から把持されるものともなる。「抑圧下にある少数者たちの文学表現の特異性」を解明し、制度的に構築された〈文学〉(六四)を相対化するため、荒井裕樹は、ハンセン病療養所において、「社会から隔離され、疎外され、抑圧されてきた人々が綴ってきた文学」に目を向けた(六五)。荒井は、社会から隔離され黙殺される書き手が、言葉を駆使することによって「自己」や「社会」との関係性を確認し、構築していたことを指摘し、〈文学〉に孕む問題を模索した。療養所設立以前にハンセン病者が蔑視のまなざしの中に置かれ、表象されてきたという『縁外縁』の改稿の過程を解き明かすことは、こうした療養所設立以後、書き手となる病者が強いられる隔離と抑圧の問題を浮き彫りにさせもする。そして、それは、隔離と抑圧を強いた日本の〈近代〉あるいは〈文学〉の問題を捉え直す契機を与えうるものなのではなかろうか。

また、第二に、近代における病と温泉のかかわりの有り様を再考する契機を与えるという点で意義がある。『縁外縁』において、自由な〈観光〉が許された存在としての〈露伴〉が訪れる場所としてあるばかりでなく、病を患う者の到達点として温泉はあった。さらに改稿を通して、ハンセン病を患う〈妙〉の〈生〉と関わり合う温泉という場が、単純に救済の場としてあるばかりでなく、前近代的・医学的・宗教的認識と複雑に絡み合い、蔑視と救済の両義的な矛盾する気運を内包した場としてあることが浮かび上がってくる。近代の温泉という空間がいかにハンセン病患者の排除と包摂に関わってきたのか、これまで様々な分野から、様々な角度で提起され検討されてきたが、『縁外縁』の改稿の分析を通して、温泉の可能性と限界とを再び問い直す契機が与えられるといえるだろう。

病者を差別的に映し出す描写の削除と復活は、その病に対する医学的パラダイムシフトと、その病とその罹患者を国家がいかに管理するかといった国家政策と響きあいながらもたらされた。病を患う生前の〈妙〉に対する第三者による差別的なまなざしや、〈露伴〉の都合の良い解釈は、病を患う当事者たちを外側から拘束する国家や社会の認識そのものである。国家による排除の枠組みが、作者や読者のなかに浸透していく過程において、それらの箇所には大きな変更を要請することとなった。

また、変更が加えられることなく、〈妙〉の〈生〉が一貫して「温泉」という場とかかわりあうのは、温泉という場が、前述の大きな転換の時代状況に応じてその場の意味を更新させながら、「癩」との

関係を担保してきたことにあるだろう。すなわち、表立って看守されるダイナミックな転換の背後で、温泉は、伝統的に「癩」と接近する場としての性格を、従来とは異なる新たに導入された医学的知見や宗教的動向に連動して更新していったのだ。いずれの版においても温泉は、〈妙〉の「癩」としての〈生〉が、第三者に語られ、第三者のまなざしのなかに包摂されてしまう過程を補強するものであったといえるのだ。そのような意味で、改稿は、二節でみてきた山中の温泉に至る〈妙〉の〈生〉が、当事者の外側から拘束され続け、第三者の認識との関りを免れ得ないものとしてあることを照らし出すのである。

現代社会の支配体系の特徴を論じる中で、〈生政治〉という概念を提示したフーコーの議論を受けて、アガンベンは、死の権力としての古い主権権力との連続のうちに〈生政治〉を捉えた^(六六)。彼は、多様な〈生〉の中から端的に殺害可能な〈生〉を抽出する、いわば「むき出しの生」を生産する〈生政治〉の一面を指摘した。数十年にわたり繰り返される『縁外縁』の改稿は、こうした病に対する微細な認識の変化と〈生政治〉の暴力性を顕現させるものだった。そして、そこに一貫して存在する温泉は、「むき出しの生」という存在の形式を際立たせて映し出すものだったのである。身体(裸体)を観を養う「解剖政治」と、公衆衛生を管理する「生政治」の両者のもとに置かれた温泉は、〈文学〉において、「むき出しの生」を規定する政治に潜む暴力や矛盾を照射するものなのだ。

以上の分析を踏まえると、『縁外縁』には、〈妙〉の痕跡として髑髏が残されていたように、女性かつ「癩」としての〈生〉の痕跡が留められている。〈妙〉は、〈觀光者〉である〈露伴〉や、〈觀光〉に従事する宿屋の主人にとって、異質な他者としてしか語られることのない存在である。しかし、山中の温泉に身の置き場を見つけ、現実社会において語り得ない〈生〉の有り様を〈露伴〉を前に語ることで、自己の〈生〉の痕跡を残そうとしていたのである。

一方、治療効果のある温泉に〈妙〉が導かれていることばかりでなく、病者を取り巻く社会システム、第三者の認識の変容に温泉という場が応答し、その場を意味づけていくことを、改稿の問題を通して浮き彫りにした。初出において、「癩」に対する前近代的な解釈は、宗教による新たな救済活動と、医学的なパラダイムシフトによって変更を余儀なくされていた。そうした病を取り巻く当時の社会状況の変化に、改稿は呼応していたといえる。『縁外縁』に横たわるのは、〈妙〉の〈生〉の問題であると同時に、そうした〈生〉が〈露伴〉や第三者によって捻じ曲げられ、都合の良い解釈が付与される〈生政治〉の暴力だった。そして、そこに一貫して存在する温泉という舞台は、「むき出しの生」という存在の形式を際立たせて表出するものだったのである。〈妙〉は、従来捉えられてきたような、仏教的解釈によってのみ成立する存在でなければ、〈露伴〉あるいは作者露伴ばかりの抑圧的視座の下に置かれた存在でもない。作品の生成

と改稿は「癩」病とハンセン病との位置づけが揺れ動く狭間に置かれ、異質な他者としてゆがめられる〈生〉を映し出していたのである。

〈露伴〉がふらりと日光湯元へ湯治旅行に訪れるように、温泉は、確かに近代において、経済政策と結びついて、国家という中心的秩序に包含された空間であったといえる。一方、山奥の温泉に〈妙〉が庵を構えたように、その秩序を維持するために、その秩序に包含されることのない周縁者を囲い込む空間でもあった。髑髏を前にして〈露伴〉は〈妙〉に悟りを見出して物語を締めくくり、先行論者は超越的存在と位置づけ、現実の苦境を見逃してきたが、温泉に着目したとき、そうした周縁者たちを取り巻く差別的構造の隠蔽を暴き出すことができる^(六七)。実際の社会で温泉は、中心と周縁との間にあるすべての衝突が浄化され、それらがあたかも調停されているかのように見せることが期待されたわけだが、文学における温泉は、その衝突の痕跡と、見過ごされてきた存在を留めているのだ^(六八)。

《注》

- (一) 馬場義弘「三新法期の都市行政——大阪の衛生行政を事例に」『ヒストリア』一四一、一九九三年、尾崎耕司「一八七九年コレラと地方行政政策の転換——愛知県を事例とし

(二)

て『日本史研究』四一八、一九九七年、小林丈広『近代日本と公衆衛生——都市社会史の試み』雄山閣出版、二〇〇一年、山本志保「明治前期におけるコレラ流行と衛生行政——福井県を中心として」『法政史学』五六、二〇〇一年。スーザン・ソントグは、生物学的・医学的ではなく、社会によって形成された「隠喩」として「病」を捉えた（スーザン・ソントグ『隠喩としての病』（新版）富山多佳夫訳、みず書房、一九九二年（原著一九七八年）。アーサー・クライマンによれば、「患者」は、生物医学的な論理体系に基づき、医療者が疾患を扱う際に用いる呼称であるのに対し、「病者」は、社会的・文化的側面から捉えられた「病」の解釈を示すものであり、当事者の生きた経験を包摂する（アーサー・クライマン『病いの語り——慢性の病いをめぐる臨床心理学』江口重幸・五木田紳・上野豪志訳、誠信書房、一九九六年（原著一九八八年）。その理論を敷衍したうえで、ハンセン病のライフヒストリーを検討した蘭由岐子や、療養所文学の自己表現を追究した荒井裕樹は、「患者」と「病者」を使い分けている（蘭由岐子『病いの経験』を聞き取る——ハンセン病者のライフヒストリー』皓星社、二〇〇四年、荒井裕樹『隔離の文学——ハンセン病療養所の自己表現史』書肆アルス、二〇一一年）。本稿は、それらの議論を念頭に置いて「患者」ではなく「病者」という表現を多く採用する。

初出以後、『縁外縁』は、幸田露伴の生前、一一の媒体に収録されている。すでに、中村仁美が〈資料〉として整理しているが（中村仁美「幸田露伴「縁外縁」対髑髏」諸本間における異同〈資料〉『文月』五、二〇〇〇年十一月）、それらの収録媒体間の異同によって次の四種に分類できる。

(三)

【一】（題名は『縁外縁』）

初出『日本文華』（二八九〇年、博文館）、『短編小説明治文庫』四（一八九三年、博文館）、『太陽』博文館十周年記念臨時増刊号（一八九三年、博文館）

【二】（題名は『対髑髏』）

『小説 葉末集』（二八九〇年、春陽堂）、『露伴集』一（一九一一年、春陽堂）、『現代日本文学全集』八（一九二七年、改造社）

【三】（題名は『縁外縁』）

『露伴叢書』（一九〇二年、博文館）、『露伴叢書』前編（一九〇九年、博文館）

【四】（題名は『対髑髏』）

『名家傑作集第五編 白露紅露』（一九一六年、春陽堂）、『明治大正文学全集』六（一九二八年、春陽堂）、『露伴全集』（一九三〇年、岩波書店）

【一】と【二】には、題名変更という大きな変更があるが、本文の異同は、語尾や用語等の六箇所の小さな変更に留まっている。よって、本稿では、以上の四種の分類を踏まえながら、【一】、【二】、【三】、【四】の三つの媒体を比較することとする。特に断りのない限り、引用は『縁外縁』（二八九〇年）の初出を用いる。改稿を扱う引用箇所においては、『縁外縁』（博文館、一八九〇年）、『縁外縁』（露伴叢書）博文館、一九〇二年）、『対髑髏』（名家傑作集 第五編 白露紅露）春陽堂、一九一六年）を用い、三つのバージョンを、「初出」、「明治三五年版」、「大正五年版」と記して比較する。また、作者幸田露伴と、作中人物を区別するため、本稿では作中人物を〈露伴〉と表記する。また、旧

字は新字に改め、ルビは省略する。

(四) 柳田泉『幸田露伴』中央公論社、一九四二年、塩谷贊『幸田露伴』上、中央公論社、一九六五年。

(五) 平岡敏夫「第二章」『近代文学史』明治の文学』紅野敏郎・三好行雄・竹盛天雄・平岡敏夫編、有斐閣、一九七二年。

(六) 井波律子「露伴初期」『日本研究』(一六)、国際日本文化研究センター、一九九七年九月。

(七) 登尾豊『「対髑髏」論』『文学』一九七六年八月(『幸田露伴論考』学術出版会、二〇〇六年)。

(八) 関谷博『「対髑髏」の問題—煩悶の明治二十三年へ—』日本近代文学会「日本近代文学」四七、一九九二年一〇月(『幸田露伴論』翰林書房、二〇〇六年)。

(九) 出口智之は、「大詩人」から分離する形で脱稿された『縁外縁』の成立過程を探り、改稿の理由を「大詩人」との関係から考えることで、「小説の執筆に関して露伴が抱えていた問題意識」を炙り出している。構想のもとになったとされる「大詩人」の草稿では、日光湯元から「魂精峠」を越えて山中で一軒家を見つけ、その家の主の若い女と一夜を共にする。『縁外縁』で〈妙〉が自身の恋の身の上を語る部分で「大詩人」では欠落しているが、欠落後には、里人の口から〈露伴〉が「癩」を病んだ女性の話を聞く場面が置かれており、『縁外縁』と同様の展開となっている。出口によれば、「大詩人」は完成後、何らかの事情で出版が頓挫し、作者露伴は、その作品を「毒朱唇」「縁外縁」の二作品に分割して発表することとなったという。『縁外縁』と「大詩人」の相違は、〈露伴〉が女と同衾し、里人の話を聞いて「冷汗」をかいて「懺悔」するものとなっている点にある。また、「大詩人」では、その山中での出来事は〈露伴〉による想像とされていた。これを受けて、同衾の相手が「癩」女で

あると判明することで、〈露伴〉の欲望と行為に罰が与えられる結末が「大詩人」には置かれていたのだが、そこには想像の出来事を現実において罰するという「ひずみ」が生じてしまった。「大詩人」から継承された「ひずみ」を解消することが『縁外縁』成立と改稿の背景にあると出口は指摘する(出口智之「大詩人」から『対髑髏』へ—〈露伴〉の消滅—『文学』六(二)、二〇〇五年一月(『幸田露伴の文学空間—近代小説を超えて』青簡舎、二〇一二年)。

(一〇) 前田愛「露伴における立身出世主義—「力作型」の人間像—」『国語と国文学』一九六八年四月、山田有策「露伴と「名匠もの」—「解釈と鑑賞」一九七八年五月。

(一一) 山崎眞紀子「お妙の孤独—『対髑髏』への視角—」『露伴小説の諸相』専修大学大学院文学研究科畑研究室、一九八九年三月。

(一二) 関谷博「初期露伴の文学的課題」『新日本古典文学大系明治編—幸田露伴集』二二、岩波書店、二〇〇二年。

(一三) 田中キヤサリン「怪奇小説におけるハンセン病の肖像—幸田露伴『対髑髏』を中心に—」『大手前大学論集』(一六)、大手前大学、二〇一六年三月。

(一四) 関谷、前掲論文。

(一五) ジョン・アーリは、日常生活空間から断絶された観光地空間に対して、一方的かつ客体的に「まなざし」を投げかけ、意味づけを行う行為を「観光」として見做している(ジョン・アーリ、ヨナス・ラースン『叢書ウニベルシタス 増補改訂版 観光のまなざし』加太宏邦訳、法政大学出版局、二〇一四年)。本稿では、旅の道中で、ある対象をまなざし、自身の秩序の内で意味づけようとする態度に着目し、〈露伴〉を〈観光者〉として位置付けたい。

(二六) 井上理恵「無限の闇——『十三夜』『樋口一葉を読みなおす』日本文学協会新・フェミニズム批評の会編『樋口一葉を読みなおす』学藝書林、一九九四年。

(二七) 小田切秀雄「なんだ、生意気な女」『樋口一葉全集』三(上)、附録、筑摩書房、一九七六年。

(二八) 文部科学省『学制百二十年史』ぎょうせい、一九九二年。

(二九) 〈妙〉自身は、母の残した「二通の御書置」に書かれた病の事実を明示していないが、初出時の小川村の宿の亭主が描写する〈妙〉の様子、あるいはその様子を、明治三十五年版において「癩」一言で言い換えたところからすると、〈妙〉がハンセン病を患っていたのは確かである。

(三〇) 日本では、説話集や仏教の経典において、前世に業を犯した者に対し、仏の罰として患うものとされ、天刑病、あるいは、遺伝病であると考えられてきた(金井清光『中世の癩者と差別』岩田書院、二〇〇三年)。

(三一) 近代以前における「癩」の位置づけは諸藩で異なるが、多くは穢多身分の下役で、癩病人の死体処理などの役務を担っていたとされる(財団法人日弁連法務研究財団ハンセン病問題に関する検証会議編『ハンセン病問題に関する検証会議 最終報告書』明石書店、二〇〇七年)。賤民化した「癩者」の支配関係について藩・地域によってばらつきがあるが(上杉聰「明治四年賤民廃止令の法的內容——その施行過程の研究」『部落解放研究』(二九)、一九八二年)、鈴木則子は、賤民として扱われたことに加えて、「癩」家筋「観」が浸透したことが「癩者」に対する忌避・排除の原因となったのではないかと指摘する(横田(鈴木)則子「物吉」考——近世京都の癩者について『日本史研究』(三五二)、一九九一年)。

(三二) 上杉聰『明治維新と賤民廃止令』解放出版社、一九九〇年。

(三三) 柳田、前掲書。

(三四) 平岡、前掲書。

(三五) 登尾、前掲論文。

(三六) 井波、前掲論文。

(三七) 山崎、前掲論文。

(三八) 伊藤克己は、様々な史料をもとに、江戸時代に「癩」病を適応症とした温泉として、宮城県中山平温泉(大崎市、旧

玉造郡鳴子町)、遠刈田温泉(刈田郡蔵王町)、山形県赤湯

温泉(南陽市)、群馬県万座温泉(吾妻郡嬬恋村)、草津温

泉(吾妻郡草津町)、川中温泉(吾妻郡吾妻町)、神奈川県

蘆之湯温泉(足柄下郡箱根町)、新潟県大湯温泉(魚沼市)、

富山県立山温泉(現在荒廃)、和歌山県湯の峰温泉(田辺市)、

広島県宇賀温泉(広島市安佐北区朝町)、愛媛県道後温泉(松

山市)を挙げている(「江戸時代の温泉と「癩病」」日本温

泉文化研究会編『論集 温泉学』——湯治の文化誌』岩田

書院、二〇一〇年)。

(二九) 菅野剛宏「温泉イメージの変容——広告・雑誌記事にみる

志向の変化」日本温泉文化研究会編『論集 温泉学』——

温泉の文化誌』岩田書院、二〇〇七年、関戸明子『近代ツ

リズムと温泉』ナカニシヤ出版、二〇〇七年。

(三〇) 高橋陽一「明治前期の温泉と政府——衛生問題・温泉論と

旅先地域の動向」日本温泉文化研究会編『論集 温泉学』

——湯治の文化誌』岩田書院、二〇一〇年。

(三一) 伊藤、前掲論文。

(三二) 草津温泉の開湯伝説は、一一九七年、源頼朝が浅間山麓で

鷹狩をした際に不思議な童子の示現によって湧き出る湯を

見つけたというもので、頼朝のもとに現れた薬師如来の権

化である童子は、他のさまざまな病とともに白癩を挙げ、

この湯によって病苦から救われると告げたという。そのと

き頼朝が座った盤石を御座の石、湧き出る湯を御座の湯と呼ぶようになり、以後、不思議な童子は薬師如来の権化と信じられ、草津の湯は霊泉としてその名を高めていった。

元禄年間に書かれた『吾妻郡略記』には庶民が利用した共同浴場五湯が記され、そのうちの御座の湯が特に「癩」病に効能があるとされた。草津の湯治場は、湯畑の上手に薬師堂がある。薬師如来の足元から温泉が湧き出す位置関係に、薬師如来の加護を求めた信仰の場だった。

(三三) 折田佐吉『草津温泉の古々路恵』(一八八〇年)では『内務省衛生局雑誌』第一号掲載の「熊谷県管下鉱泉分析表并医治効用」から、大川角造『草津鉱泉入浴教之捷徑』(一八八五年)では『日本温泉独案内』から分析表が引用されたように、温泉の宣伝には、温泉の効能・分析表が利用されていた(関戸、前掲書)。

(三四) 安井広「エルウイン・ベルツと温泉医学」日本医史学会『日本医史学雑誌』二八(二)、一九八二年四月。

(三五) 外国人や一般客が増加し、「癩」病者が温泉街に居住・逗留することは草津発展の障害になると考えられるようになり、一八八六年、官選草津戸長角田浩平が草津温泉改良会を組織し、草津中心部からの病者締め出しを本格化させる。改良会によって病者の居住・逗留場所を湯之澤という地域に移す分離政策が強行され、一八八八年に、患者とその家族、「癩」病者専門の宿屋などからなる湯之澤集落が誕生した。湯之澤集落は、草津町の正式な行政区であり、生活費と治療費といった資力がなければ、移り住むことができなかったが、病者たちが自由に療養できる所として発足した。(森修一「湯の沢部落と日本のハンセン病政策」『現代思想』三一(一三)、青土社、二〇〇三年一月、川上武『現代日本病人史』勁草書房、一九八八年、栗生楽泉園患者自治会編

『風雪の紋―栗生楽泉園患者五〇年史―』栗生楽泉園患者自治会、一九八二年、中村茂『草津「喜びの谷」の物語―コンウォール・リーとハンセン病―』教文館、二〇〇七年)。

(三六) 伊藤、前掲論文。

(三七) 拙稿「温泉場のポリティクス―末広鉄腸『政治小説雪中華』と箱根」『言語情報科学』二〇、二〇二二年一月)および、「川上眉山「書記官」の温泉場―余暇空間に交錯する力学」『論樹』三二(一)、二〇二二年三月)を参考されたい。

(三八) 一八八九年頃到達した、その名もなき温泉が、草津のある群馬県内に位置していることは、「癩」である事実と関連する。一八八四年に現在の高崎線が、上野熊谷間から高崎、前橋まで延長されたことも、宣伝効果によって治療を期待する病者を温泉地へ集めることに貢献したであろうが、高崎線の高崎を分岐点とした三方向に、草津温泉、小川温泉、日光湯本温泉は位置づけられる。

(三九) 塩谷賛、前掲書、二瓶愛蔵『若き日の露伴』明善堂書店、一九七八年、関谷博、前掲論文、笛木美佳「幸田露伴の大正五年―名家傑作集第五篇『白露紅露』における改稿をめぐって(上)』『学苑』(七〇七)、昭和女子大学近代文化研究所、一九九九年三月。

(四〇) 関谷、前掲論文。加えて、関谷は、「ハンセン病の扱いの大きなゆらぎ」は、作者露伴が文学と社会の関わりを問う文学極衰論争に動揺され、省察の必要に迫られていたことを示すもののだとしている(「補注」登尾豊・関谷博・中野三敏・肥田皓三編『新日本古典文学大系 明治編』幸田露伴集、岩波書店、二〇〇二年)。

(四一) 出口、前掲論文。

(四二) 田中、前掲論文、田中キヤサリン「日本、欧米大衆文学に

おけるハンセン病と優生学』『ノーマライゼーション』三一(三五五)、二〇一一年二月

(<https://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/prdl/jsrd/norma/n35/n355005.html>)。

(四三) 田中は、英米圏のハンセン病表象については、ロッド・エドモンドの研究

(Edmund, Rod, *Leprosy and Empire*, Cambridge University Press, 2006) を参照している。ロッド・エドモンドは、英文学において一八六〇年代からハンセン病が怪奇小説、探偵小説、紀行文などのジャンルで描写されるようになったことを指摘し、植民地が帝国に齎す脅威への不安を読み解いて、ハンセン病と帝国主義の関係を論じた。

(四四) 探偵小説において、ハンセン病は、医学的に未解明であることが利用され、センセーショナルな病として描き出されていたことが指摘されている

(Susan L. Burns, *Making Illness into Identity: Writing "Leprosy Literature" in Modern Japan*, *Japan Review*, 16, 2004

細川涼一「探偵小説とハンセン病——国枝史郎・小栗虫太郎・橋外男」『仏教』(五〇)、二〇〇〇年五月、細川涼一「ハンセン病と勃興期の探偵小説——正木不如丘と小酒井不木」『部落解放』(四九五)、解放出版社、二〇〇二年一月、細川涼一「米田三星論ノート——探偵小説と医学」『ヒストリア』(二七七)、二〇〇一年一月)。

(四五) 犀川一夫『ハンセン病政策の変遷』沖縄県ハンセン病予防協会、一九九九年。

(四六) 井上謙「らい予防方策の国際的変遷」愛生編集部『愛生』一〇、一九五七年。

(四七) 藤野豊『「いのち」の近代史——「民族浄化」の名のもとに迫害されたハンセン病患者』かもがわ出版、二〇〇一年。

(四八) また、『巴波川』において、青木某は、一時病に倒れ、宿屋の女房とお蔭の看病を受けている。そのとき、お蔭たちは、薬を買いに行くにも「虎列刺」(コレラ)と疑いの種が蒔かれぬよう配慮しているが、お蔭の患う病に関しては、そうしたコレラのような感染が危惧されるものと認識していない。

(四九) 森修一・加藤三郎・横山秀夫・田中梅吉・兼田繁「草津湯の沢ハンセン病自由療養地の研究」自由療養地構想から絶対隔離政策へ」日本ハンセン病学会『日本ハンセン病学会雑誌』七二(三)、二〇〇三年八月、柳橋寅男・鶴崎澄則編『国際らい会議録』らい文献目録編集委員会、一九五七年。

(五〇) 神山復生病院(一八八九年、テスト・ウイード神父)、目黒慰養園(一八九四年、ケート・ヤングマン)、回春病院(一八九五年、宣教師ハンナ・リデル)、琵琶崎待労院(一八九五年、宣教師ジョン・メリー・コール)等が設立されている。

(五一) 荒井英子『ハンセン病とキリスト教』岩波書店、一九九六年、阿部安成「病むからだ、信ずるこころ——ハンセン病の療養所におけるキリスト教信仰をめぐるいくつかの論点」『Working Paper Series』(二〇六)、滋賀大学経済学部、二〇一四年一月。

(五二) それを証左するかのように、後述する「癩予防ニ関スル件」成立以後、キリスト教による活動は、「絶対隔離」の法的整備と寄り添い合っていく。ハンセン病患者とその家族を支える活動を継続させながらも、キリスト教団体の活動は、国家の強制隔離政策を是認し、皇室の恩寵策と密接にかかわりあいながら広がっていった(荒井、前掲書)。ハンセン病隔離政策を推進する具体的動向は、一九二〇年代に設立

された日本 MTL (日本救癩協会) の救癩活動にかがうことができる (平田勝政「解説」『近現代日本ハンセン病問題資料集成補巻 日本 MTL』不二出版、二〇〇九年)。

(五三) 兵頭晶子「民間治療場のトポグラフィ——「癩病」と「精神病」をめぐる、排除と包摂の日本近代」『部落解放研究』(二〇〇八)、部落解放・人権研究所、二〇一八年三月

(五四) 矢野治世美『和歌山の差別と民衆——女性・部落史・ハンセン病問題』阿吡社、二〇一七年。

(五五) 長野浩典『放浪・回遊民と日本の近代』弦書房、二〇一七年、兵頭、前掲論文。

(五六) 関義男「文学に見る障害者像・生田葵山『団扇太鼓』——ハンセン病・迷信が支配していた時代の悲劇」『ノーマライゼーション 障害者の福祉』二五(二八二)、二〇〇五年一月。

(五七) ハンセン病者とキリスト教の関係は、たとえば、大島療養所(現在の太田青松園)でキリスト教信者によって、結成された「靈交会」の詩作活動にかがうことができる。その活動の全貌は、長田穂波(一八九一・一九四五)や三宅官之治(一八七九・一九四三)の活動とともに、宣教師エリックソン夫婦による、報告や詩作作品の翻訳によって知られている。「靈交会」は、療養所内で礼拝を行うのに加え、『靈交会報』という月刊誌を出版し、信者の創作物を発表していた。「巡礼姿で一人旅」(長田穂波『みそらの花』光友社、一九二八年)という一人の信者のエピソードに付された穂波の詩においてはキリスト教入信に救いを見出す信者の姿がある(阿部安成『靈交』にあとがきを記す——香川県大島の療養所をあらわす点描『WorkingPaperSeries』(一五〇)、滋賀大学経済学部、二〇一一年七月、田中キャサリン「戦前日本のハンセン病療養所における短歌による交流

——九州療養所の『檜の影』を中心に」『ハンセン病市民学会年報』ハンセン病市民学会、二〇一三年、阿部安成「読めない詩——癩療養者長田穂波と訳詩ロイス・エリクソン」『WorkingPaperSeries』(二〇一三)、滋賀大学経済学部、二〇一三年九月、田中キャサリン「ロイス・ジョンソン・エリクソン夫人と長田穂波——キリスト教宣教師と癩文学の普及——」『大手前大学論集』(一五)、大手前大学、二〇一五年三月)。

(五八) 森修一・石井則久「ハンセン病と医学——隔離政策の提唱とその背景——」日本ハンセン病学会『日本ハンセン病学会雑誌』七五(一)、二〇〇六年二月。

(五九) 森修一・石井則久「ハンセン病と医学——絶対隔離政策の進展と確立——」日本ハンセン病学会『日本ハンセン病学会雑誌』二〇〇七年二月。

(六〇) 末尾以外の箇所においても、「露伴」の妄想する場面が削られ、「露伴」と名乗ることや、呼び掛けることを削減するという変更がみられる。「露伴」の存在が希薄化されることで、対象を差別的に捉える立場が曖昧にされる。関谷は、「ハンセン病の扱い方」の揺らぎの背景に、文学と社会の関わりを問う文学極論争に動揺され、省察の必要に迫られた作者露伴の政治的立場を読み込もうとした。しかし、その立場は社会に敏感に反応して「省察」とはいえど、社会のなかで徐々に構築される差別的枠組みに明確な抵抗を示し、把握することはできなかったといえる。

(六一) 正木不如丘『執念』(一九二六年)では、ハンセン病は怪奇性を高める題材として扱われ、侮蔑的な視座を向けられる。一方で、同じくハンセン病患者を描く小酒井不木『直接証拠』(一九二六年)には、医学者かつ結核患者としての不木が追究した「医学の人間疎外」というテーマが読み取れると

した。一九三一年にハンセン病者の強制収容がはじまって以後は、米田三星『告げ口心臓』(一九三一年)や小栗虫太郎『失樂園殺人事件』(一九三四年)などのハンセン病患者の療養所が探偵小説の舞台とされていく。また、西尾正『土蔵』(一九三五年)などの隔離の根源となる伝染病説に影響を受けた探偵小説もある(細川、前掲論文)。

(六二)

田中、前掲論文。

(六三)

ハンセン病者による「創作」と、「らい」を取材した文学」を手当たり次第に取りまとめたものとして、長島愛生園内らい文献目録編集委員会編『らい文献目録「第一」社会篇』一九五七年(「ハンセン病」雑誌記事索引集成 専門書誌編)補巻、皓星社、一九九九年)がある。また、『日弁連法務研究財団 ハンセン病問題に関する検証会議最終報告書資料編』(二〇〇五年)、日弁連法務研究財団・ハンセン病問題に関する検証会議編『ハンセン病問題に関する検証会議 最終報告書』(上下巻、明石書店、二〇〇七年)などでも、一部触れられる。それらを参考にしながら、ハンセン病を描く作品を収集・調査した田中キヤサリンの資料によると、生田葵山『団扇太鼓』以降、探偵小説の発表される一九二〇年代までの間は、ハンセン病表象を描く作品群が発掘されておらず、その実態を明らかにするのが難しい状況にあるようだ。

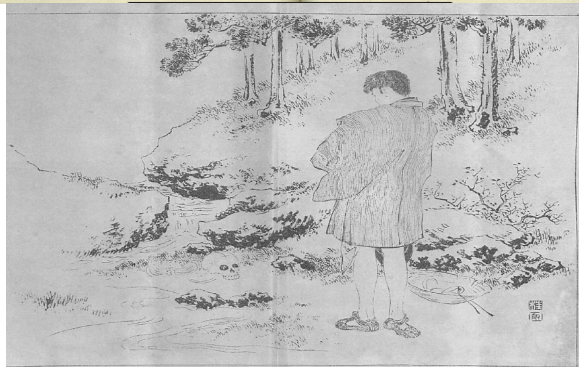
(六四)

小森陽一「近代読者論——近代国民国家と活字を読む者」井上俊ほか編『岩波講座現代社会学』(8) 文学と芸術の社会学 岩波書店、一九九六年、小森陽一『「ゆるぎ」の日本文学』日本放送出版協会、一九九八年、小森陽一「起源の言説——日本近代文学研究」という装置」栗原彬ほか『内破する知——身体・言葉・権力を編みなおす』東京大学出版会、二〇〇〇年。

(六五) 荒井、前掲書。

(六六)

フーコーは、現代社会の支配体系の特徴を論じる中で、「生政治」という概念を提示した(ミシェル・フーコー『性の歴史』「知への意志」渡辺守章訳、新潮社、一九八六年、ミシェル・フーコー『ミシェル・フーコー講義集成「知への意志」——コレージュ・ド・フランス講義 1970-1971年度』慎改康之・藤山真訳、筑摩書房、二〇一四年)。フーコーによれば、死に対する権利(殺す権利)を一つの特徴とする古い君主制の主権に対し、「近代」以降の政治権力は、国家(あるいは政府)による支配が、法制度を課すということに留まらず、市民一人ひとり(一個人)の「生」を支配するに及んだ。「生権力」には二つの形態(工場・学校・監獄などにおいて身体の規律・訓育を目指す「解剖政治」と、出生・死亡率の統制、公衆衛生、住民の健康への配慮など、生そのものの管理を目指す「生政治)があるとされ、次第に前者から後者へ比重が移ってきたとされる。こうしたフーコーの議論に対し、アガンベンは、死の権力としての古い主権権力との連続のうちに「生政治」を捉えた。そのうえで、多様な「生」の中から端的に殺害可能な「生」を抽出する、いわば「むき出しの生」を生産する(「生政治」の一面を指摘した。身体(裸体)観を養う「解剖政治」と、公衆衛生を管理する「生政治」の両者のもとに置かれた「温泉」は、「文学」において、「むき出しの生」を規定する政治に潜む暴力や矛盾を照射するものなのである。



(六七) 補足として口絵の変化についても以下に示しておきたい。
 図1 『縁外縁』初出の「日本之文華(一)」挿絵(上、作者武内桂舟、博文館、一八九〇年一月)と「同(三)」挿絵(下、作者武内桂舟、博文館、一八九〇年二月)

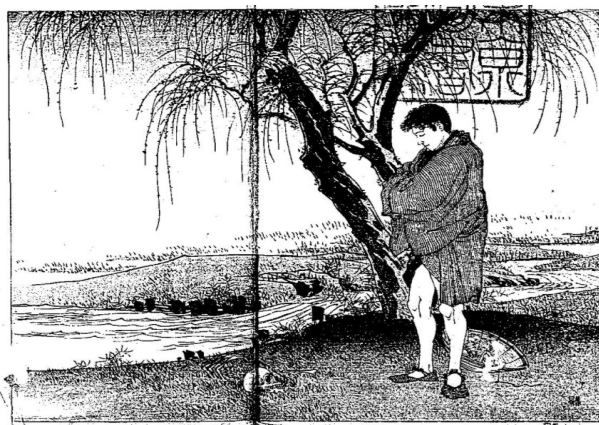


図2 『対觸髅』(春陽堂、一八九〇年六月)の口絵(作者後藤芳景)

図3 『縁外縁』『明治文庫第四篇』博文館、一八九三年一月二日の口絵（作者不明）



田中キヤサリンは、前掲論文において、関谷博の指摘に従い、図1の挿絵を、「後藤芳景（生没年未詳）によるもの」としている。加えて、図2の口絵を「同じ芳景の作ではあるが微妙に挿絵が異なっている」と指摘する。しかし、これらの指摘は誤りである。図1の挿絵の落款は「桂舟」と記されており、武内桂舟の作であることがわかる。さらに付け加えるとすれば、その後の改稿において、桂舟作の挿絵の場面が、別の作者の手で口絵として表出されていくといえる。初出では、その名のごとく物語の間に挿入されるイラストであったものを、後に続く版では、それらのうちのいずれかが、物語がまだ始まらない口絵に選出され、

その物語において印象に残る一場として提出される。この挿絵と口絵の変遷をたどると、〈露伴〉の視座に立った題名となる『対髑髏』は、髑髏を眺める〈露伴〉の立場を強調しているが、〈妙〉の視座に立つ『縁外縁』は、〈露伴〉の一方的な視線ではなく、〈妙〉と〈露伴〉が対置されていることがわかる。

また、〈露伴〉が髑髏を眺める図1下段の挿絵と図2の口絵を比較すると、本稿で分析した内容の変化に照応するような差異が見られる。初出（図1下段）では髑髏が木々に囲まれた山の中に置かれ、〈露伴〉の表情は見えないが、髑髏すなわち〈妙〉がこちら側を見ている。それに対し、『対髑髏』（図2）では川辺であることが強調され、髑髏すなわち〈妙〉の真正面からの視線は制され、〈露伴〉の表情と視線を確認できる構図に変更されている。すなわち、〈妙〉を外側から捉える〈露伴〉の側に寄り添うことで、山奥に到達する〈妙〉の〈生〉の在りようが挿絵（口絵）においても捻じ曲げられていくのである。

（六八）

トリン・J・ミンハは、特にアフリカ・アジア・南アメリカの「第三世界」に属する女性たちに焦点を当て、言語、文化、風習などの側面から、弱者／他者として彼女たちが経験する障壁や閉塞感、疎外感などを明らかにした。他者としての〈妙〉の部分的な語り、声は、ミンハが着目したような女性の主體的な語りとは異なるかもしれないが、他者としてその〈生〉を捻じ曲げられながらも、〈生〉の痕跡、その声がいかにしてテキストの内に留められているのかを探ることは、テキストの死角の発見に繋がるのではなからうか（トリン・J・ミンハ『女性・ネイティブ・他者』ポストコロニアリズムとフェミニズム』竹村和子訳、岩波書店、二〇一一年）。